

年忌法要は仏法聴聞の勝縁ぶつぽうちょうもん しょうえん

第2組 光照寺
墨林 浩氏

私たちにとって、ご家族の年忌法要は故人とご縁があった方々が、仏様の教えに出会う大切な仏事であります。

しかし、一般的にはどうも、「追悼」または「慰霊」といった言葉で表されるような、故人を偲び、その死を痛み悲しみ、「冥福を祈る」といった心情で法要をお勤めしていることが多いようです。それは、亡き故人に対しての「追善供養ついぜんくよう」といった営みであったりもします。確かに、亡き人を偲び、故人との関わり合いを

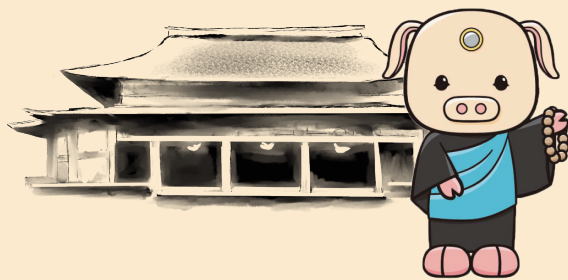
追慕することは人として大切な心情ではありましょう。

ただし、その心情の延長上で、仏前において「家内安全、無病息災、除災招福」を願う思いを抱くならば、それは故人や仏事を、残された者の欲望を膨らませる道具にしかねない、あえて申せば、仏事を煩惱の応援団にしているように思えます。

そもそも仏様の教えは、「諸行無常じょぎょうむじょう」を説くものであります。人の生き死しょうじむじょうにも「生死無常しょうじむじょう」「老少不定ろうしょうふじょう」と教えています。

真宗門徒の宗祖である親鸞聖人も、人の死を「なごりおしくおもえども、娑婆しゃばの縁つきで、ちからなくしておわるときに、かの土どへはまいるべきなり（『歎異抄』聖典 771 頁）」と、なごりおいしい心情はあれども、事実は娑婆の縁が尽きて、亡き人はお浄土で諸仏としてましますと仰っています。さらに「親鸞は父母の孝養きょうようのためとて、一辺にても念仏もうしたること、いまだそうらわず（『歎異抄』聖典 769 頁）」とも仰っています。

私たち真宗門徒にとっての年忌法要は、故人を偲びつつも、ご命日をご縁にして、この我が身が存在する「生命」の深い歴史を確かめ、この身にかけられた阿弥陀様のご本願に領きつつ、仏恩報謝ぶつおんほうしゃの中で、仏法聴聞を深める勝縁として大切にしたいものです。



南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう

みんなに 原真はらまこといが かけられている

真宗大谷派（東本願寺）大阪教区

大阪教務所 大阪市中央区久太郎町 4-1-11

☎(06)-6251-4720 <http://www.icho.gr.jp>

